第１部　札幌市のあゆみと将来像

札幌駅、北大周辺の上空写真

1章　歴史・自然

1－1　札幌市のあゆみ
1－2　位置と広さ
1－3　自然

時　計　台

１－１　札幌市のあゆみ

札幌が明確に歴史にその姿を現したのは、江戸時代に入って津軽藩の記録にとどめられたことによる。ついで石狩川流域がサケの産地として知られ、幕末には農業開拓も始まっていた。

明治になって開拓使が設置され、北海道開拓の中心に位置づけられることによって、その発展の基礎が作られた。札幌には開拓使以来多くの行政機関や諸施設が設置され、太平洋戦争下では北海道経済の中心地となり、戦後のめざましい発展に及んだ。

開拓使設置当時、現在の市域には先住するアイヌ民族と何百人かの和人が居住しているだけであった札幌市が、今日196万人を擁する大都市に発展した経過について、そのあらましを振り返ってみることとする。

１　明治以前の札幌

石狩川とその支流に広がる石狩平野に位置する現在の札幌市域の状況が記録にとどめられたのは、寛文９年（1669年）から翌年にかけてのアイヌ民族と和人との戦いに関する史料が最初とされる。それには、「石狩湊口より一里程登り候て、はつしやふより二里程登候てさつほろと申所に狄（アイヌ民族）有。さつほろの枝川に縦横半里計の沼御座候由」（津軽一統志巻第十）とある。事件当時の石狩地方には、アイヌ民族の首長が率いる地域集団も存在していた。やがてこの地域集団は、松前藩の力によって次第に解体させられていった。

石狩川流域は、早くからサケの豊富にとれるところとして知られ、その多くはアイヌ民族の食糧としての干鮭（からさけ）に、あるいは塩引きに加工されて本州方面に送られていった。17世紀後半に、石狩地方にも藩士に知行の代わりに与えるところの商場（あきないば）＝交易場が設定された。やがて18世紀に入ると、これを特定の商人に運上金を納入させて場所の経営を任せる場所請負制が導入された。これにより、札幌市域を含めて石狩十三場所（上サッポロ、下サッポロ、上ツイシカリ、下ツイシカリ、ナイホ、シノロ、ハッサムなど）が成立、夏商（干鮭、毛皮など）・秋味商（塩引鮭）を通じてアイヌ民族との交易を盛んにし、本州からは鉄製品をはじめ古着や装飾品などが多くもたらされた。

寛政11年（1799年）、対ロシア問題から東蝦夷地が幕府直轄となり、ついで文化４年（1807年）、西蝦夷地も直轄された。この時、最上徳内や近藤重蔵など、幕府による東西蝦夷地・千島・樺太に及ぶ大規模な調査の過程で、石狩平野の存在や石狩川の産物、そしてそこに住むアイヌ民族の問題が重要視された。しかし幕府直轄以降、漁場でのアイヌ民族の労働力の集中的利用や疱瘡の流行は、アイヌ民族の人口の激減や疲弊をもたらした。

文政４年（1821年）、蝦夷地は松前藩に復領された。その後、弘化３年（1846年）、松浦武四郎が樺太探検の帰途、石狩平野を通り、札幌近辺の様子を書き残した。またこの頃から蝦夷地近海に日本へ通商開国を求める外国船渡来が頻繁となり、蝦夷地開拓や海防論を主張する者が多くなった。

安政２年（1855年）に、幕府は北方問題の一層の緊迫化に対応するため、再び蝦夷地を直轄し、箱館奉行を置いて統括させた。この再直轄は樺太情勢を主要因としていたために西海岸が重要視され、その中でも大河が流れ、東西蝦夷地交通の要衝であり、また広大な平野を持つ石狩地方がその中心となった。

このため安政２年に石狩役所が設置され、同４年には銭函から豊平、千歳を経て東蝦夷地の勇払とを結ぶ札幌越新道が開かれ、この豊平川畔にはのちに吉田茂八、志村鉄一が渡守として住んだ。さらに安政５年には石狩の場所請負を廃して箱館奉行の直支配とし、より強力な行政体制を敷いた。

こうした中で、札幌の農業開拓が始まった。まず安政４年から発寒、星置などが在住制によって拓かれた。在住制は、士分の者が手当を得て入地し、農民を招募して開拓するもので、このうち発寒村は明治まで続いた。ついで石狩役所の責任者である荒井金助が自費で農民を招募して荒井村を開き、在住村である中島村と合して篠路村となった。

しかしこれらは、農民に対して米など食糧の扶助を主体とする小規模のもので、成果もおのずと限界があった。このため箱館奉行は年間3000両を投じ、農業基盤整備を十分に行って一層の開拓の振興を図ることとし、慶応２年（1866年）、まず大友亀太郎を担当者として現在の東区に御手作場（直営農場）を設置させた。そのとき開削した用悪水路のひとつが、後にその一部が創成川の一部となる大友堀である。こうして幕府の崩壊時には発寒・琴似・星置・篠路・札幌（御手作場）の村々

があり、農業が営まれていた。中でも早山清太郎は、安政５年に稲作に成功し、ほかにも稲作を行う者があった。こうした中で、アイヌ民族にとっては、依然として苦しい生活が続いた。

一方、この状況下で、石狩開拓・建府論も多く主張されたが、この中の松浦武四郎による札幌建府論が明治に入って新政府に採用され、具体化していった。

2　明治初期の札幌

ロシアは、幕末から急激に南下政策を推進し、樺太にその勢力を拡大していった。侍従清水谷公考らの意見上申によってその事実を知った維新政府は、早急に蝦夷地開拓を進めようとしたが、箱館戦争のため、一時中断した。

明治維新後、札幌の開拓計画は、まず明治２年（1869年）木戸孝允を中心にして軍務官・兵部省によって作成された。彼らは、戊辰戦争の敗者である会津藩降伏人たちを石狩・発作部（発寒）・小垂内（小樽）へ移住させようとし、箱館戦争終了直後から実行に移した。しかし開拓使の設置により計画を変更し、３年に計画を中止した。

２年７月８日開拓使が設置された。そして初代長官に鍋島直正、判官に島義勇・岩村通俊らが任命され、石狩辺に本府を置くことになった。次いで８月15日、蝦夷地は北海道と改称され、国郡も設定された。

石狩に本府建設の準備を命じられた島判官一行は、10月12日銭函に到着した。その直後から本府地の選定と豊平開墾を開始し、札幌を本府建設地とした。そして11月中旬から官舎官宅の建設を開始した。

島判官の本府構想では、まず現在の札幌の中心部に、北端に300間四方の本府（本庁）敷地、その南側中心から南北の道路を通し、その道路の両側に長官邸をはじめとする官宅・病院・学校・役所などを配した。それらの南端に幅42間の空閑地を東西に帯状にとり、そこに二筋の土塁を設け、その南側に本町を配した。これらを実際の札幌に当てはめると、南北の道路は、南から北へ流れる創成川東岸の道路、空閑地は大通となる。この計画は、途中まで実行され、創成川東岸で大通の南端に大門を設け、北部を官庁・官宅街、南部の本町には商工業者を入地させて民地とした。さらに西方に御宮を配し、琴似・発寒・篠路・札幌の既存の村と新設の豊平村を周辺に配置しようとした。

また島判官は移民の招致や札幌銭函間の新道の開削なども計画した。しかし雪と寒さに加えて、食料や予算の不足もあって、島判官に任された北海道西部13郡の経営は困難を極めた。

東久世通禧長官が、西部13郡の場所請負人廃止と漁場の開拓使直営などを島判官の独断専行と判断したためか、その報告をうけた政府は、島判官を東京に召喚後転任させた。

３年３月、岩村通俊判官が函館から西部巡視に来て札幌を視察した後、７月、開拓使は「札幌建府の得失衆議紛々」のため、村落のできるのを待って、本府建設をすすめるという方針を示した。

この間、先に島判官によって計画募集された移民は続々と札幌付近に移住し、庚午一の村（苗穂）・庚午二の村（丘珠）・庚午三の村（円山）などができた。９月になると東久世長官・黒田清隆次官らが札幌を視察して、島判官の雄大な構想を改めて認識し、そして10月黒田次官の建議、11月の西村貞陽権監事などの「札幌開府に付当使一般会計の目処」などの建議もあって、正式に４年から札幌への本府建設が決定した。

４年、札幌に赴任した岩村判官らは、移民の招致、道路工事、市街の測量などに着手すると共に、島判官の構想を一部変更し、開拓使庁舎や官邸、役所の建設を再開した。市街地は、11間幅（約20m）の道路を南北に交叉させる碁盤の目状とした。その基本的なブロックは、60間四方（3600坪 約11,880㎡）とし、６間幅（約11m）の中通りを設けた。そして幅３尺の側溝を道路両側に付けたり、市内最初の公園でかつ農業試験場である偕楽園の建設、最初の官立学校である資生館設置など近代的色彩も濃いものだった。その一方で市街地に隣接して遊廓を設けたり、移民に割渡した区画も標準が間口５間奥行27間（135坪 約446㎡）の短冊型であるなど、近世都市の様式も取り入れていた。しかしこれらの建設も６年に一段落すると、工事人夫たちの離札と共に、札幌は公共投資欠乏のため市中に大不況が襲い、庶民の生活は困窮し、逃亡者が多く出て、生活基盤のない人工都市の側面も露呈した。

４年から黒田次官は、開拓顧問にホーレス・ケプロンをはじめとして、測量・土木のワーフィールド、農業のエドウィン・ダンなど多くの外国人技師たちを雇い入れて、先進国の農業工業の知識や経験、専門技術の導入や機械など近代的なものを受け入れて、開拓の革新を図った。また、８年、東京の開拓使仮学校が札幌学校として札幌へ移転し、翌９年、札幌農学校として開校した。この時マサチューセッツ州立農科大学からウィリアム・

クラークを教頭として迎えた。クラークの在札期間は僅か８カ月であったが、彼の残したという「ボーイズ，ビー　アンビシャス」は有名である。また彼の残したキリスト教精神は、札幌農学校出身者を通して、後まで受け継がれていった。

開拓使は、庶民の衣食住や生活習慣などの近代化も図った。例えば家屋建設費の貸与をして、家屋の防寒住宅への改善を促した。しかし庶民は移住当初の草葺掘建小屋から柾葺石置き屋根の家屋に改良した程度であった。また庶民の生活習慣では、明治半ばでも陰暦による行事が多く続いており、太陽暦も簡単には定着しなかった。

４年以降、平岸・月寒・白石・手稲などへ移住が行われ、７年には屯田兵制度が制定され、翌８年には琴似に、９年には山鼻・発寒に入植した。

また、この頃には、中央政府の殖産興業政策にならい、札幌にも生糸・みそ・しょうゆ・ビール・諸機械などの官営工場が続々と建設された。そのため開拓使では、これらの原料となる農産物を農民に奨励した。しかし、農民は、米についての強い執着および農業に必要なわらの供給や生活習慣などから稲作への思慕を捨て去ることが出来ず、稲作の努力を続け、明治10年代中頃から札幌付近でも作付けされるようになった。

６年、函館札幌間の札幌本道の開通、12年、小樽銭函間道路の開通、翌13年、札幌手宮間の鉄道も開通し、大交通網も整備され、それに伴って札幌周辺の移住地間を結ぶ小交通網も道庁時代初期にかけて整備されていった。

15年、開拓使は廃止され、北海道は札幌･根室･函館の三県に分離された。この頃の札幌区郡の人口は18,123人、戸数は4,630戸であった。

また多年にわたり洪水を起し、その度に大きな被害を与えてきた豊平川に堤防が17年に完成した。さらに18年には市民の要望の強かった市中の大下水網が、南６条～北１条間の西５丁目（後に新川とよばれる）を皮切りに、道庁時代初期にかけて開削され、整備された。そして区市街の総代人会で地主のアカシア・さくら・やなぎなどの街路樹の植え付け管理が可決されるなど、現在の環境整備や都市基盤整備に当たる政策が実行に移されていった。

３　明治後期の札幌

三県制度は、明治19年（1886年）に廃止となり、北海道庁が札幌に設置され、函館、根室に支庁が置かれた。初代長官には、札幌建設に旧労のあった岩村通俊が命ぜられた。岩村は、自ら製麻工場視察のため滋賀県へ出張して、北海道製麻会社設立に尽力するなど、北海道への資本の導入に努力し、官営工場の払下げとともに、札幌での民間工業の発展を促した。また、道庁時代初期には札幌周辺の開拓のため、現在の新川である大排水路などを開削し、鉄道線路以北の湿地帯の開発を促進させ、20・21年の新琴似屯田、22年の篠路屯田などを入植させた。

明治20年代の札幌区内は、札幌県時代から引き続き、下水施設の整備、市街道路や周辺村落との連絡道路の砂利敷き改良など生活基盤の整備を行った。また、都市衛生の観点から、汚水・し尿処理や市街清掃・塵芥処理など生活環境の整備にも目が向けられるようになった。特に市民・警察とも狸小路辺の私娼窟の廃絶に努力した。一方、資本の導入は、労働問題を引き起こしつつあった。特に遠隔地から斡旋業者の仲介で集められた製麻の職工は、労働条件の悪さに死者や逃亡者を出したりした。また当時の札幌は、全道各地への労働力供給地となっていた。

25年、札幌は大火に見舞われ、区役所、地方裁判所、銀行、警察署、新聞社など887戸が類焼した。この年は、北海道物産共進会を開催する予定でいただけに、その打撃は大きいものがあった。

27年、新渡戸稲造と彼の支持者によって遠友夜学校が開設された。これは、貧しい人々や昼間学ぶ機会のない人々に教育の門戸を開いたものであった。さらにこの頃は、禁酒会など社会改良運動や県人会活動などの社会運動・活動が盛んになった時代でもある。

32年、札幌は、函館・小樽とともに北海道区制が施行され、ここにはじめて道庁による官治時代を脱して、自治時代に入ることとなった。当時の札幌区の人口は、40,578人、戸数7,009戸、札幌郡（江別・広島・対雁を除外）の人口は、32,925人、戸数は5,536戸であった。さらにこの頃から教育の充実が取り上げられ、女子教育充実のために庁立札幌高等女学校が設立され、40年には、札幌農学校が東北帝国大学農科大学となった。

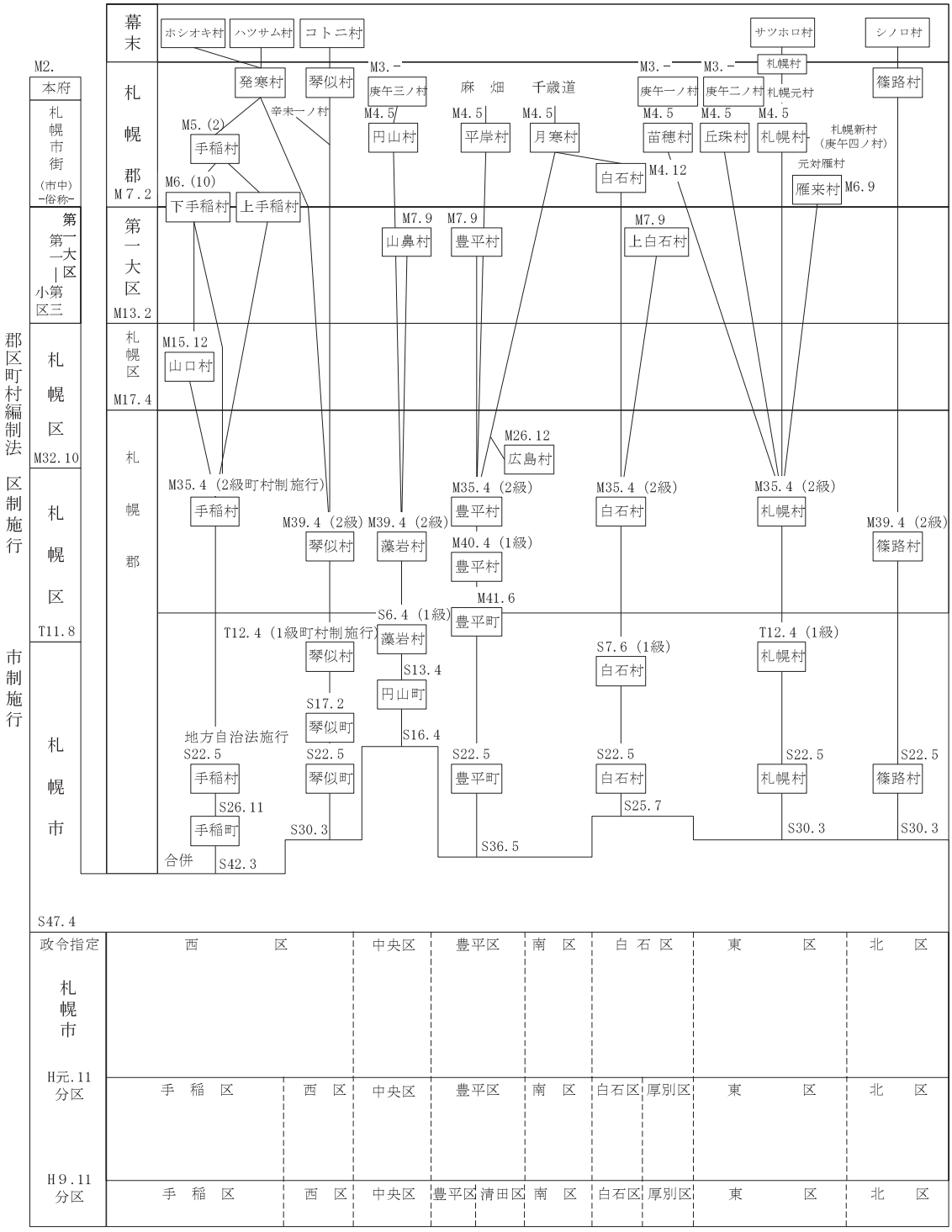
これより先、北海道二級町村制が35年に手稲・豊平・白石・札幌各村、39年に琴似・藻岩・篠路各村に施行された（その後の変遷は「札幌市部お

よび諸村の変遷図」参照)。市域の発展に伴い、43年には豊平・白石・札幌・藻岩の各町村の一部が札幌区に編入され、区の人口もおよそ９万人を数えるに至った。

札幌区の人口は日露戦争前後より増加傾向を示し、札幌は北海道庁その他諸官庁の所在地として、いわば「月給取り」の街・一大消費都市として発展し続けた。42年、札幌区が実施した「札幌区区勢調査」で、区民の半数以上が37年以降の移住者であり、区民の８割が借地借家住まいであることなど、札幌が人の入れ替わりの非常に激しい街であることがわかった。また札幌の地価は他都市と比較して高額であり、地代家賃は高かった。そのため地代家賃の引下げ運動もおこった。

一方、明治37・38年の日露戦争は、札幌の市民生活を大きく変化させた。まず、社会改良的運動であった社会活動は、戦争を機に出征軍人家族救護の名のもとに、さまざまな救護団体を生み、活

札幌市部および諸村の変遷図



動するようになった。そして、この時期には食生活にも徐々に変化がみられ、牛乳、肉、卵など栄養価の高い食物も一部の人びとから広まりつつあった。西洋料理にも工夫を凝らすようになり、スープ、アイスクリーム、ミルクソーダなども加わった。また、五番舘が札幌初のデパートとして開業し、女店員を採用したり、映画の常設館が開業するなど札幌の顔が増えていった。豊平館を公会堂として使用することや、大通を逍遥地（しょうようち）として利用することが許されるのもこのころからである。『最近之札幌』（明治42年刊）が紹介するように、札幌は遊覧の街にもなった。

４　大正時代の札幌

大正２年（1913年）、大暴風雨で豊平川は大洪水となり、堤防は決壊し、被害は膨大なものであった。この復旧には、役所はもとより土木派出所、警察署が協力して当たった。

３年、北海道煉乳㈱が設立され、また５年には豊羽鉱山が精錬を開始し、古谷製菓工場が設立されて近代的産業が発展してきた。７年は開道50年に当たる年で、記念事業として博覧会が開催され、入場者は、１カ月半の期間中に140万人を数えた。当時の全道人口が217万人であるから、その盛会ぶりがうかがえる。札幌は、広く全道、全国に紹介され、会場に隣接する山鼻地区は急速に開けていった。この博覧会を契機に、市内馬車鉄道が廃止され、電車となった。農科大学が東北帝国大学から分離し、北海道帝国大学となったのも同じ年であった。

９年、第１回国勢調査が実施され、札幌の人口は102,580人を数えた。11年８月１日には、市制が施行された。当時の札幌市は、人口127,044人、戸数は22,915戸、面積は約24km^{2}であった。大正時代は区制が充実し、市制の施行により自治制の進展期であるとともに、産業の振興期でもあった。

３年にはじまる第１次世界大戦は、市民生活にさまざまな影響をもたらした。４年から５年にかけて農産物を中心とする海外輸出は急激に増加し、このため札幌の周辺農村は、異常な好景気に包まれ、札幌市街の商店街では古着や子供のおもちゃがよく売れた。

７年のシベリア出兵に際し全国各地で米騒動が起こり、札幌でもそのあおりを受けて米価が急騰した。このため米の廉売を行い急場をしのいだ。また大戦中から大戦後にかけての景気の変動は、物価高騰による生活不安を訴える人々を多く輩出させた。北海道庁が10年に社会課を設け、社会事業を公的に推進したのを受けて、札幌区は、区営住宅建設・公設市場・職業紹介・窮民救助その他の社会事業的業務を分担し、これが11年の社会係設置につながった。

その一方で大戦後の国民生活の改善を図ることを趣旨に北大教授の森本厚吉を中心に文化生活研究会が設立され、「文化住宅」、「文化台所」など「文化」が喧伝された。また道庁主催で生活改善展覧会が各地で開催されて、生活の見直しが図られたり、美術展、音楽会も盛んに催されるようになった。

５　第２次世界大戦前・中の札幌

大正12年（1923年）、都市計画法適用、15年、市街地建築物法適用など札幌市へも都市計画関係法が適用されて、昭和に入り本格的な都市計画事業が実施されていった。まず昭和２年、都市計画区域が札幌市だけでなく豊平、琴似、藻岩、白石、札幌の１町４村の一部を含む広大な地域に設定された。この後、都市計画による事業（街路整備・風致地区整備、公園整備など）に加え、上下水道の整備、道路の整備、交通体系の整備などさまざまな事業が順次行われた。

たとえば、大正15年度から昭和10年度まで下水道、側溝工事が実施された。上水道事業は、昭和６年（1931年）に豊平川水利権が認可され、９年に工事が開始され、12年に営業を開始した。これらのほかに道路の開削や舗装、橋梁の修築、昭和３年から５カ年計画で学校新増築工事などが行われた。これらの土木事業は、失業対策事業としても位置付けられていた。交通事業は、２年に札幌電気軌道会社から事業を買収して、電気局として市営電車事業を開始し、５年には市営バスも運行を開始した。２年に北海タイムス社が作った札幌飛行場（北24西６、７）は、８年から逓信省により整備が行われ、12年には札幌－東京間の定期航空運航が開始された。

また、この頃からカフェーが増加し、映画館が繁盛する一方で、スポーツも次第に盛んとなった。そのため、４年に中島公園にプールが設置され、６年には大倉シャンツェが竣工し、９年、円山に総合グラウンドが竣工した。そして特に冬季スポーツでは、12年に次の冬季オリンピックの札幌開催も決まった。

15年に実施された第５回国勢調査で、札幌市は人口が20万人を突破し、函館市を抜いて人口で全

道一の都市となった。翌16年には円山町を合併し、人口224,729人、世帯数45,488世帯となった。

12年の日中戦争ぼっ発は、札幌市民へも大きな影響を与えた。オリンピックの返上もその一つだが、新聞でも出征兵士の見送り、金品や物資の供出や倹約などを盛んに宣伝した。そして、自分の小遣いを供出した子供、布生地の倹約のためスカートを短くする運動をした女学生たちなどが盛んに新聞記事に取り上げられた。

太平洋戦争のぼっ発は、市政の上に大きな影響を与えたばかりでなく、市民は窮乏生活を営むことを余儀なくされ、戦争協力のために各方面に動員された。すでに戦時協力のための住民組織である公区制がしかれ、市民は食糧をはじめとする物資の配給は、公区の隣組を通じてしか手に入らない状況となり、食糧の不足を補うため野草採りや家庭菜園が奨励された。また出征した男性の代わりに女性が労働力として動員され、女子挺身隊の名で軍需工場などで働いた。

20年、米軍による大都市空襲は次第に地方都市にまでおよび、７月14日、15日に丘珠など札幌近郊も被害を受けた。やがて、広島・長崎への原子爆弾の投下があり、敗戦を迎えた。

6　戦後の札幌

昭和20年（1945年）10月には敗戦にともない札幌にも占領軍が進駐し、豊平館をはじめ大きな建物、円山総合運動場などの施設が接収された。この年は全国的に大凶作となり、主食糧の配給も不足しがちで、「食糧問題が市政の最重要事」といわれるほどであった。

翌21年は食糧不足をはじめとする諸物資の不足でヤミ値を生じさせるとともに、インフレが発生した。札幌でも狸小路の創成川縁一帯にヤミ市ができ、生活必需品を求める市民が集った。また外地からの引き揚げや疎開者の復帰などは、出生の増加とともに、札幌市の人口を急増させ、住宅不足の状況となった。

22年、市長が初めて公選となり、民選市長のもと市民と一体となって市民生活の再建と新しい都市づくりを進め、市の機構も部制が敷かれて１局５部24課となった。食糧問題や引き揚げ者受け入れなど山積する問題をかかえた市は、翌23年、警察制度、消防制度の改革によって自治体警察、自治体消防が発足し、札幌警察署および消防本部が設置された。24年、札幌市は創建80周年、自治制施行50周年を迎え、盛大な記念式典が挙行された。このころには経済安定の兆しも現れ、食糧事情も好転し、市民生活も安定の方向に向かった。

25年には、第１回札幌雪まつりが開催され、その後市民の冬のレクリエーションとして定着した。この年、札幌村の一部および白石村と合併し、人口は313,850人、面積は133.168km^{2}になった。

26年、中断されていた札幌－東京間の定期航空路が再開された。また北海道開発局が設置され、翌27年、北海道総合開発計画第１次５カ年計画が策定された。開発計画の推進に伴い、大資本を背景とする本州の有名商社が札幌市に集中してきたため、都市規模が急激に拡大していった。30年には札幌村、篠路村および琴似町と合併して、面積は284.15km^2、人口は426,620人になった。

昭和30年代、高度経済成長期の全国的な都市集中傾向は、北海道における中心都市である札幌市で特に顕著となり、道内石炭産業の不振から生じた炭鉱離職者の札幌市流入とかさなって、人口は40年に794,908人で30年から37万人も増加し、45年には1,010,123人となり百万人を超えた。住宅地も周辺に拡大し、周辺町村のベッドタウン化がすすむとともに、36年には豊平町、42年には手稲町と合併し、面積1,117.98km^{2}となった。

札幌オリンピック開催が決定すると42年には『札幌市建設５年計画』が策定された。オリンピック関連施設の整備事業などに国や道の資金も札幌都市建設や社会資本整備に投入されたため、一都市での財政規模以上の都市建設・都市整備が実現した。市役所新庁舎、都心部地域暖房、地下街、北海道厚生年金会館などが相次いで完成、46年に開通した地下鉄南北線、そしてオリンピックを目指した民間資本の建設ラッシュと相まって、都心部の様相は一変した。そのため札幌はオリンピックを境にその景観が一変したと言われるようになった。

このような札幌市の急激な発展は、国際的にも注目を浴びはじめ、34年、米国ポートランド市と姉妹都市提携の盟約を交わした。その後も47年ミュンヘン、55年瀋陽、平成２年ノボシビリスク、22年大田広域市と姉妹都市や友好都市の盟約をむすんだ。

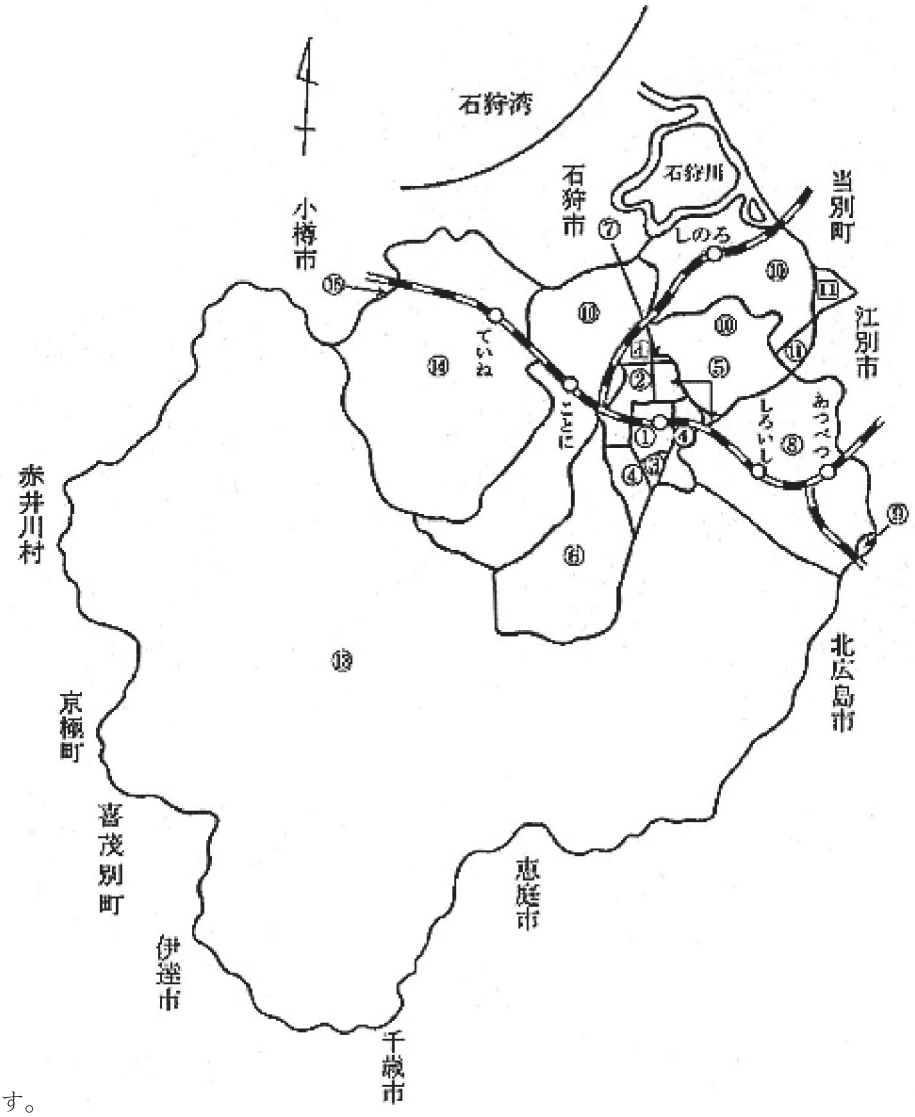
47年は札幌市の歴史上、画期的な１年となった。まず２月に、アジアで初の冬季オリンピック大会が開催され、成功裏に終了した。さらに、４月には川崎、福岡両市とともに政令指定都市に移行し、中央・西・北・東・白石・豊平・南の７区体制となった。

昭和48年（1983年）10月の中東産油国の一斉値

市　域　の　変　遷

番　号	年　　月　　日	面積（㎢）	備　　考
①	明治４（1871）年12月	5.492	札幌創建当初
②	15（1882）年２月８日	13.472	三県分立当初
③	19（1886）年12月31日	14.557	北海道庁設置時代、中島公園の区域編入
④ 4	43（1910）年４月１日	24.169	豊平町・白石村・札幌村・藻岩村の一部を編入、区の一部を琴似村に分割
⑤	昭和９（1934）年４月１日	29.274	札幌村の一部を編入
⑥	16（1941）年４月１日	76.254	円山町と合併
⑦	25（1950）年４月１日	76.657	札幌村の一部を編入
⑧	25（1950）年７月１日	133.168	白石村と合併
⑨	26（1951）年４月１日	133.487	広島村の一部を編入
⑩	30（1955）年３月１日	287.666	琴似町・札幌村・篠路村と合併
⑪ 11	30（1955）年４月１日	286.666	江別市と交換分合
⑫	30（1955）年10月１日	284.15	国土地理院の改測による
⑬	36（1961）年５月１日	1,008.67	豊平町と合併
⑭	42（1967）年３月１日	1,117.98	手稲町と合併
⑮	48（1973）年12月１日	1,118.01	小樽市の一部を編入
⑯	63（1988）年10月１日	1,121.18	国土地理院の改測による
⑰	平成３（1991）年４月１日	1,121.12	国土地理院の境界修正による
⑱	26（2014）年10月１日	1,121.26	国土地理院の計測方法と計測の基礎となる地図の変更による

市　域　変　遷　図



4 11 は減少を示す。

札幌市の人口規模のあゆみ

人口規模	年月次
人口 50万人突破	昭和31（1956）年６月
60万人突破	35（1960）年５月
70万人突破	38（1963）年５月
80万人突破	40（1965）年５月
90万人突破	42（1967）年11月
100万人突破	45（1970）年７月
110万人突破	47（1972）年11月
120万人突破	49（1974）年10月
130万人突破	52（1977）年８月
140万人突破	55（1980）年10月
150万人突破	59（1984）年２月
160万人突破	63（1988）年３月
170万人突破	平成４（1992）年３月
180万人突破	10（1998）年６月
190万人突破	20（2008）年８月

注：　各月１日現在の推計人口（現在の市域に組み替えた数値）による。
＜資料＞　まちづくり政策局政策企画部

上げに端を発した石油危機は、世界経済を混乱させた。札幌でも、スーパーのトイレットペーパー販売に行列をつくるなど、市民生活へも少なからぬ影響を及ぼした。

昭和50年代に入ると、長期的な経済不況による影響や（旧）石狩町および（旧）広島町に所在する大規模住宅団地への転出増などから、札幌市の人口増加は鈍化傾向となってきたが、それでも59年には人口150万人を超えた。その後、道内景気の回復とともに、札幌市の人口も安定した増加を続け、63年には人口160万人に達した。

人口の急増は、市街地の拡大をまねき、上下水道や市内交通などの社会資本整備を必要とした。そのため長期総合計画を策定して対処した。

人口の増加による住宅地の広がりや道路整備による舗装道路の広がりは、それまで地下に浸透していた雨水までも下水道に流し込むことになり、下流の下水道からあふれ出る都市型水害を起こすようになってきた。昭和50年や56年の洪水などは、大雨や台風による石狩川や茨戸川の氾濫に加え、それらの雨水を引き受けた下水道の下流地域での噴出なども起こり浸水被害を大きくし、典型的な都市型水害でもあった。このような都市問題への対処も求められるようになってきた。

46年12月地下鉄南北線（北24条真駒内間）が開通したあと、51年東西線（白石琴似間）、53年南北線延長（北24条麻生間）、57年東西線延長（白石新さっぽろ間）が開通した。地下鉄の開通と同時にその主要駅は乗り継ぎ駅としてバスターミナルなどを整備した。国鉄およびＪＲでは、千歳線の切替による新駅の整備、郊外での住宅地の広がりに対応して59年の森林公園駅開設をはじめとして既存の駅の間に新駅を設けるなど札幌とその周辺との交通の便を拡充した。さらに札幌市の南北の連絡を阻害していた函館本線の高架事業が行われた。これにより札幌の南北の交通を分断していた踏切が無くなり、北方への発展が促進された。それにともない広域道路網は、都心部に集中する国道などの主要道路について、バイパス道路の整備、都心から郊外へ向かう放射状道路、都心を取り巻く環状道路を整備し再編成を行った。

7　平成・令和の札幌

昭和60年（1985年）には154万人であった札幌市の人口は、増加数が年々小さくなってきたものの、平成27年（2015年）には195万人に達した。その間住宅地はさらに広がりをみせ、平成元年西区と白石区を分区してそれぞれ手稲区と厚別区を設置し、９年に豊平区を分区して清田区が設置され、10区体制となった。

札幌市は、昭和57年に北方都市の街づくりの情報交換の場として第１回北方都市会議を雪まつり期間中に開催した。昭和61年と平成２年のアジア冬季大会、３年ユニバーシアード冬季大会、２年から行われているパシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）、11年中央アジア非核兵器地帯国連札幌会議など国際的なイベントや会議を開催し、国際コンベンション都市となっている。また雪まつりやYOSAKOIソーラン祭りなどの市民の手作りで始まったイベントも外国からの参加団体が増えて、国際的なイベントになっている。

市内交通機関は、地下鉄路線が昭和63年東豊線（栄町すすきの間）、平成６年東豊線延長（すすきの福住間）、11年東西線延長（琴似宮の沢間）が開通し、運輸の便を高めた。15年度末には市営交通は、中央バス、じょうてつバス、ＪＲバスなどの民間バス会社にバス路線を譲渡してバス事業を廃止した。路面電車は、27年にそれまで途切れていた西４丁目とすすきのを西４丁目通で結びループ化された。

札幌駅周辺の整備も進み、ＪＲタワーの建設、大丸デパートや電気製品の大型量販店など大ショッピングセンターの開業に加え、札幌駅北口方面の開発も進み、エルプラザや国の合同庁舎建設などがあいつぎ、札幌の集客の中心が大通南１条から札幌駅周辺にかわった。

平成の札幌は、昭和63年（1988年）に策定された『第３次札幌市長期総合計画』、平成12年（2000年）に策定された『第４次札幌市長期総合計画』、25年（2013年）に策定された『札幌市まちづくり戦略ビジョン』とそれらの下で繰り返された５年計画・新まちづくり計画により、まちづくりがすすめられた。

また、平成10年には、阪神淡路大震災を契機に、災害対策基本法に基づき策定していた札幌市地域防災計画を抜本的に見直し、地震災害対策編、風水害対策編、雪害対策編などを含んだ計画に改定した。その後、事故災害対策編に続き、23年の東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の事故を受け、25年に原子力災害対策編を策定した。

30年９月には、北海道胆振東部地震が発生した。東区で震度６弱を観測したほか、市内の広い範囲で震度５弱以上の強い揺れに見舞われ、多くの人的被害が発生するとともに、清田区では液状化現象により多くの住宅に被害が及び、多くの箇所で道路の隆起や陥没、断水などが発生した。さらに、地震に起因して道内全域の約295万戸が停電するブラックアウトが発生し、地震による直接的な被害と併せて生活や経済活動に大きな影響があった。

札幌市では、各種生活支援制度等に関する情報提供と適切な運用、各種相談への対応について、総合的・一体的かつ迅速に行なうべく「被災者支援室」を設置したほか、清田区里塚地区等における復旧工事の本格化に合わせて、局横断的な連携体制として、「市街地復旧推進室」を設置するなど、被災された方の支援や災害からの復旧に取組んでいる。

平成の時代は、人口減少、少子高齢化などの重大な課題に直面したほか、北海道胆振東部地震を始めとした大きな地震や、大雨等の自然災害に多く見舞われた時代であった。また、令和に入り、新型コロナウイルス感染症が世界的に猛威を振るい、札幌市でも市民生活や社会経済活動に大きな影響を及ぼしている。このような厳しい時代においても、質の高い安定した雇用を創出することや、子育て世代に対する支援を充実・強化することなどにより、若い世代が地元で就職し、結婚し、安心して子どもを産み、育てていけるまちづくりを進めている。

１－２　位　置　と　広　さ

札幌市は、石狩平野の南西部に位置し、東は石狩川から野幌原始林にかけての低地帯、西は手稲山系、南は支笏洞爺国立公園に連なる一大山地、北は日本海に接する石狩砂丘地に囲まれた全国屈指の広大な面積を有した都市である。

札幌市役所本庁舎の位置は、東経141°21′16″、北緯43°03′43″であり、札幌市と緯度をほぼ同じくする世界の都市は、アジアではウラジオストク、長春など、ヨーロッパではマルセイユ、ローマなどで、ロンドン、パリは少し北にあり、アメリカではボストン、シカゴなどがやや南、ワシントン、ニューヨークはさらに南になっている。

札幌市に隣接する市町村は、後志管内の小樽市、赤井川村、京極町、喜茂別町、胆振管内の伊達市、石狩管内の恵庭市、千歳市、北広島市、石狩市、江別市、当別町の合計７市３町１村である。

また、大正11年（1922年）８月１日市制施行以来、市域を拡大すること９回に及び、総面積は令和５年(2023年)４月１日現在1,121.26km^{2}である。

市域は東西が42.30km、南北が45.40kmとなっている。

位　置　と　広　が　り

区　分	地　　名	経　　緯　　度	距　　離
東　端	厚別区もみじ台南７丁目	東　経　141°30′20″	東　西　42.30 km
西　端	南区定山渓	東　経　140°59′26″	
南　端	南区定山渓	北　緯　42°46′51″	南　北　45.40 km
北　端	北区篠路町拓北	北　緯　43°11′22″	

面積	最高地点高度	最低地点高度	市役所地点高度
1,121.26㎢	南区定山渓（余市岳） 1,488.0m	北区西茨戸（旧発寒川付近） 1.6m	20.8m

１－３　自　　然

１　地形・地質

札幌の地形は、市街地が発展してきた豊平川扇状地、その北東に展開する石狩低地帯、南西部一帯の緑豊かな山岳地、東南部で波状に連なる丘陵・台地の４つに区分することができる。

⑴　豊平川扇状地

豊平川扇状地は、南西部山地と東南部丘陵地との間を北部低地へと流れる豊平川のつくった代表的な扇状地で、札幌面と平岸面とから成っている。

札幌面の扇頂は藻岩橋付近で、扇状地面の傾斜は1,000分の６～７で北へ緩やかに傾いており、真駒内付近では標高60mであるが、大通付近では20mとなり、扇端に当たる市の北部では10mとなっている。札幌市はこの扇状地上に発達し、今や付近の山ろく・丘陵および石狩平野にもその市域を拡大した。

かつてリンゴ園の連なっていた平岸面は、札幌面より０～15mほど高い位置にあって、真駒内・平岸から扇端の国道36号付近までの間に広がっている。

⑵　石狩低地帯

長い間の海進海退により古石狩湾が隆起してできたもので、現在では、土地改良による耕地化が進んだところである。石狩川に注ぎ込む多くの河川の流域地帯で、河川、沼などの水面、低湿地、湿地性植生などの展開する独特の景観を持つ地域が含まれている。

⑶　南西部山地

那須火山帯に属する後志火山群の火山岩台地であるが、侵食が進み、起伏に富む壮大な連山となって石狩平野に望んでいる。

山頂からの眺望がすばらしい藻岩山は、天然記念物の藻岩原始林の広葉樹が生い茂り、冬は市民スキー場として親しまれており、同じく天然記念物の円山原始林をもつ円山、冬季オリンピックの主要会場となった手稲山のほか、三角山、幌見峠付近の丘陵など、市民のレクリエーションの場として好適地が多い。

東南部の山地と合わせて、札幌市の山林は市域の６割余りを占めている。

⑷　東南部丘陵・台地

札幌市の東南部は、火山灰性の低平温和な台地である。月寒付近は、上西山付近から扇状地状をなして大谷地湿原に向かって緩やかに下降し、月寒川、厚別川、三里川などが狭長な谷を刻んでいる。

台地の南方は次第に高まって山岳地形となり、冬季オリンピックの滑降コースともなった恵庭岳をはじめ、西方は札幌岳、空沼岳、無意根山など登山、スキーなどの好適地となっている。

⑸　地　　質

札幌市の地質は、おおむね第４紀沖積世（約１万年前）の沖積層で、砂、小石、粘土からなる豊平川扇状地は良好な地盤を備えているが、石狩低地帯は埴土および泥炭からなり、特に東米里、大谷地などの泥炭層の厚い地域は、地盤が軟弱で土地利用上の制約条件となっている。

これら沖積層の下は、中世代三畳紀からジュラ紀（約１億数千万年前）の古い火山岩で、東北地方の北上山脈に接続するものとされている。この岩盤は石狩低地帯では深さ4,000m余の下層に見出されるが、樺戸山地や薄別付近では、地表近くに見ることができる。

２　気　　象

札幌市の気象は、日本海側気候で、夏季はさわやかで、冬季は積雪寒冷を特徴としており、鮮明な四季の移り変わりがみられる。

札幌市の上空は、大気が西から東へ流れる偏西風帯の中に入っており、春と秋を中心に、移動性高気圧や低気圧の影響を受けやすく、天気は西から東へと移り変わっていく。

12月から２月にかけての冬季は、西高東低の冬型の気圧配置となることが多く、大陸上空の乾燥した寒気団が日本海上空に流れ込み、ここで大量の水蒸気を含んで雪雲が発生し、北海道の西海岸に達する。その結果、札幌市など日本海側には、多量の降雪がみられる。札幌では最深積雪は約１m、ひと冬を通しての降雪量は約５mにも達する。

しかし、西高東低の冬型の気圧配置も３月ごろから緩みはじめ、季節風が次第に弱まり、日差しが日ごとに強まり、３月中旬は日平均気温が０℃を超え、４月上旬には根雪の終日を迎える。

４月から６月にかけては、晴天の日が多く、街はさわやかな緑に包まれ、本州では３カ月にわたって季節を追うように順に咲く花が、初夏の一時期に集中して咲き乱れ、一年のうちで最も魅力的な季節を迎える。６月下旬ころから、日中汗ばむほどの暑い日が現れ、７月、８月は平均気温が20℃を超え盛夏となる。

夏の北海道は、梅雨前線による長雨もほとんどないため過ごしやすいが、この爽やかな季節も、駆け足で通り過ぎてしまう。

９月に入るとひと雨ごとに気温が低下し、まれに台風や前線などの影響で天気も大きく崩れることがあり、雨量も多くなる。

10月から11月にかけては、最低気温が０℃近くまで下がる日が多くなり、初霜や初雪の便りも聞かれ、木々も紅葉の季節を迎える。

11月にはシベリア高気圧の勢力が強まり気温の低下が著しく、降雪量も多くなって12月上旬には根雪となり厳しく長い冬が訪れる。

令和４年は、平均気温は10.2℃と平年よりかなり高かった。夏日は71日と平年より多く、真夏日は10日で平年並みだった。冬日は106日で平年よりかなり少なく、真冬日は33日と平年より少なかった。

３　植　　生

札幌周辺は植物種類が極めて豊富であり、北海道に産する野生種のほぼ半数を見い出すことができる。このように種類が多いのは、札幌周辺の地形・地質が多様で変化に富むこと、植物分布において北方型と南方型の接点に当たっていること、山林の多くが天然記念物、保安林などに指定されていて、開発・破壊から遠ざけられ保護されていることなどが主な理由として挙げられる。

植物帯としては、北海道は針広混交林帯と呼ばれているが、このことは、地理的には温帯と亜寒帯との移行帯であり、森林帯では温帯夏緑林（落葉広葉樹林）と北方（亜寒帯）針葉樹林の併存地帯であることを意味している。その混合割合は一様でなく、山岳地帯や野幌台地などのやや高い所では、定山渓付近で見られるようなトドマツ、エゾマツなどの針葉樹が多くなり、台地や山ろく地帯ではカツラ、イタヤ類、ナラ類、エゾヤマザクラ、ナナカマド、シラカンバなどの広葉樹の占める面積が多くなる。

市街地の植生は、本州種、外国種、改良品種などが大半を占めている。

低木には、花が美しい花木類と葉色や樹姿の美しいかん木類があり、前者としてはボタン、ツツジ、アジサイや札幌市の木であるライラックなど多くの種類の木が美しさを競っており、後者にはサツキ、イチイ、ニシキギなどが前栽や建物の腰植えなどとして利用されている。

高木は、街路樹・公園などに用いられているが、札幌市では冬季の低温のため広葉常緑の高木が育たない。街路樹としては、約24万本の高木が植えられているが、そのほとんどはナナカマド、ニセアカシアなどの落葉広葉樹である。

札幌市など積雪地帯は多年草の天国といわれ、その種類も非常に多いが、その主なものには、サクラソウ類、シャクヤク、ハマカンザシ、それに札幌市の花スズランなどが挙げられる。花壇用草花としては、春花壇用にはパンジー、ヒナギクなど、夏花壇用にはペチュニア、ベゴニア、サルビアなど種類が多い。

生　物　季　節　表

生物現象	札幌	仙台	東京	京都	福岡
たんぽぽの開花日	4月28日	3月31日	3月30日	2月24日	2月26日
うめの開花日	4月29日	3月1日	1月22日	2月22日	1月31日
もんしろちょうの初見日	5月4日	4月11日	—	3月24日	3月18日
さくら（そめいよしの）の開花日	5月1日	4月8日	3月24日	3月26日	3月22日
あじさいの開花日	7月16日	6月30日	6月5日	6月13日	6月5日
あぶらぜみの初鳴日	7月30日	7月18日	7月20日	7月15日	7月6日
いちょうの黄葉日	11月4日	11月23日	11月23日	11月24日	11月20日

注：1991年から2020年までの30年間の平均値である。
＜資料＞　気象庁

気　象　概　況 (1)

年・月次	平均気温	平均相対湿度	平均気圧（海面）	降水量	日照時間	平均雲量	平均風速	天気日数2)		
								快晴	曇天	降水
	℃	%	hPa	mm	h		m/s			
平年値1)	9.2	69	1012.4	1146.1	1718.0	7.4	3.6	13.3	165.7	175.1
平成20年	9.5	69	1012.8	1282.0	1741.6	7.5	3.3	10	176	197
令和元年	9.8	69	1012.7	814.0	1987.7	7.0	3.5	18	148	172
2年	10.0	71	1013.0	905.0	1764.3	7.5	3.3	13	162	174
3年	10.2	70	1013.1	1089.0	2049.0	6.8	3.5	20	128	159
4年	10.2	71	1012.5	1154.0	1847.8	7.2	3.4	18	143	169
令和4年1月	－3.2	76	1012.0	170.0	85.0	8.2	3.4	0	16	25
2月	－2.2	71	1013.0	112.0	120.7	7.0	3.3	0	8	18
3月	2.6	69	1013.1	54.5	131.9	7.4	3.3	1	13	16
4月	9.1	56	1014.8	15.0	243.0	5.5	4.0	5	7	9
5月	14.9	63	1010.2	66.5	224.1	6.4	4.3	3	10	10
6月	16.8	77	1009.3	71.0	173.2	7.8	3.8	1	16	12
7月	23.1	78	1008.9	63.0	179.4	7.7	3.1	1	14	8
8月	22.7	75	1006.8	233.0	152.6	7.7	3.7	0	13	10
9月	19.8	71	1014.6	87.5	196.1	6.5	3.4	2	10	7
10月	12.6	70	1018.9	80.0	164.0	5.8	2.9	5	7	13
11月	7.1	69	1016.9	82.5	96.7	7.7	3.3	0	14	17
12月	－1.4	75	1012.0	119.0	81.1	8.2	2.6	0	15	24

注：１）1991年から2020年までの30年間の平均値である。
　　２）「快晴」は日平均雲量1.5未満、「曇天」は日平均雲量8.5以上、「降水」は日降水量0.5mm以上の日数
＜資料＞　札幌管区気象台

気　象　概　況 (2)

年　次	夏　日1)	真夏日2)	冬　日3)	真冬日4)	初　雪5)	長期積雪初日5)6)	積雪終日5)6)
平年値7)	54.6	8.6	121.8	43.6	11月１日	12月６日	4月７日
平成30年	50	8	115	47	11月20日	12月６日	4月３日
令和元年	62	18	124	45	11月７日	12月20日	3月27日
2年	69	12	102	34	11月４日	12月14日	3月23日
3年	68	27	101	42	11月19日	12月17日	4月５日
4年	71	10	106	33	11月16日	11月30日	3月20日

注：１）日最高気温25℃以上。　２）日最高気温30℃以上。　３）日最低気温0℃未満。　４）日最高気温０℃未満。
　　５）前年10月から当年５月までの期間中の数値。　６）長期積雪初日と積雪終日は日最深積雪１cm以上から算出。
　　７）1991年から2020年までの30年間の平均値である。
＜資料＞　札幌管区気象台

極　　値　　表

年・月次	気温		日最小相対湿度	降水量		日最大風速		雪1)	
	日最高	日最低		日	日最大１時間	風速	風向	日降雪の深さ	最深積雪
	℃	℃	%	mm	mm	m/s		cm	cm
平成30年	33.9	－12.7	13	61.0	27.5	18.4	南	26	89
令和元年	34.2	－13.1	11	64.0	13.5	15.2	南南東	22	72
2年	34.3	－14.9	14	61.5	22.0	17.7	南	41	80
3年	35.1	－12.6	13	58.0	29.5	17.3	南南東	24	79
4年	32.9	－10.4	12	82.0	25.5	16.8	北西	50	133
令和4年1月	2.8	－10.4	36	25.0	5.0	16.8	北西	25	99
2月	8.0	-9.4	33	22.0	7.0	15.2	南	32	133
3月	13.1	－3.5	20	14.5	3.0	14.4	北西	9	108
4月	23.2	－0.9	16	5.0	2.5	14.1	南南東	1	26
5月	27.9	5.3	12	24.0	6.0	16.0	南南東	－	－
6月	30.6	7.9	37	15.5	8.0	14.5	南南東	－	－
7月	32.9	16.9	47	49.0	10.0	11.6	南南東	－	－
8月	30.5	16.4	30	82.0	25.5	11.6	南南東	－	－
9月	30.0	8.6	22	30.5	11.5	16.6	北西	－	－
10月	29.7	0.8	25	32.0	12.0	12.2	北西	－	－
11月	17.1	－4.0	27	24.5	10.0	13.7	南南東	4	2
12月	7.7	－9.3	40	26.0	6.0	14.2	南南東	17	35

注：１）年間の数値は前年10月から当年５月までの期間中の数値。
＜資料＞　札幌管区気象台